

「食べる物が無い」

山田 昌さん 94歳

昭和16年12月に始まった勝利の戦も追いつめられて激しくなり20年3月10日には東京大空襲があり、そして大阪、神戸と大都市が次々と焼け野原になって行き、ラジオのあの勇ましい「軍艦マーチ」の報せも何時の間にか「海ゆかば」の曲に変わり、アツツ島玉砕などの悲しいニュースになり、又かと言うことばかりに、そして、「近畿管区発表!!敵の編隊が紀伊水道を北上中」という放送に変わり、しばらくすると池田市五月山山上の砲台からドンドンと鳴り白い煙があがり鳥の群れのように戦闘機が飛んできました。急いで防空壕に入り、よく見ると、兵士の姿が見えるほどに飛んでいて、寒気がしました。毎日警報が出て、出たり入ったりでB29の爆音と戦闘機のドドドと言う機銃掃射に悩まされ、伊丹の飛行場を目当てにやってくるのですが、的が外れて近辺に爆弾を落として池田の五月山や池田高校の校舎に市民の配給米が入れてあり、そこへ、焼夷弾を落としオイルの匂いが付いて、配給されましたが、洗っても洗っても取れず、煮ても取れず、釜まで匂いが付いて、釜も米も捨てました。配給は少なくなり、空襲から身を守ることと食べるものに人々は、必死でした。少し物があると言えば皆走り、家で木箱に土を入れて、どこでも作物を作り、もう食べられると喜んでいると、誰かが持ち去ってしまっただけ泣き寝入り。また、ニワトリを飼って玉子も食べられると喜んでいても、夜に鳥がコツコツと声を出していたと、朝に見ると、鳥も玉子もなくなって悲しい思いをしました。干してある洗濯物持って行かれました。そんなこと今言ったら笑われるでしょうけれど、子ども達も食べるものもなく、お昼はサツマイモ一つ、それでも持ってこれる子どもはまだ良くて、持ってこれない子どももあり、運動場の鉄棒に、ぶら下がっている姿は、可哀想でした。配給はますます少なくなり、何の草かわかりませんでした。つぶして、丸めて団子にしたのが配給になり、数が少なく皆とりあいつこしました。

夜は、黒いカーテンを引いて、豆電球一つで暗くて何もできず、空襲に備えて服のまま横になっていました。やがて、広島、そして長崎に原子爆弾が落とされてどうにもならず、8月15日に隣り組の皆が集まって、終戦の放送を聞きました。これから先どうなるのだろうと言うよりも、皆何か終わった、ほっとしたと言う感がありました。暗かった部屋が明るくなり、空襲で起こされることがなくなりました。この戦争は何だったのでしょうか!!悲しいことばかり、父や夫、そして息子を失った人はどうつづいてもらえばよいのでしょうか。戦争は悲しい事ばかりだと思います。過ぎてしまった遠い79年の事です、今の世界は一触即発の時代になり、戦争の恐ろしさを知る人も少なくなっていく今、少しでも知って戴ければと思って書きました。平和な楽しい日々が続きます事を祈るのみです。